

トウダイグサ科エノキグサ属の一年生草本。全国の道端、畑地、明るい空き地などで普通に見られる。背丈は30～50cm。葉は互生し、長楕円形～広披針形、長さ3～8cm、幅1.5～3.5cm。葉の先端は尖り、縁には先の尖らない浅い鋸歯がある。葉脈は主脈の基部付近からはっきりとした側脈が左右に1本ずつ出て3本に見える3行脈、あるいは2本ずつ出る5行脈であり、これがアサ科エノキ属の落葉高木エノキの葉に似ることからエノキグサの名がある。

8月から10月に葉腋から長さ2cmほどの花序を1～5個出す。上部に小さな多数の雄花が穂状につき、基部に総苞に抱かれた雌花が1～3個つく。雄花の花被片の色が紅色を帯びるので、花全体が赤っぽく見える。雌花を抱く総苞は編み笠状で、ちょうど阿波踊りで女性の踊り手が被る編笠に似るので別名「アミガサソウ」の名がある。

トウダイグサ科のトウダイグサは「灯台草」と書く。ここでいう「灯台」は、岬の先端にあつて船の安全のために灯される灯台ではなく、室内用の照明器具で、上皿に灯油を満たし紐状の灯心に火をつけて明かりを取る灯台のことである。牧野富太郎はその説明に「和名ハ其草狀燈臺（往時使用セシ室内燈火ノ具即チ燈架ニシテ今日海岸ニ見ル燈臺ニ非ズ）ニ似タルヨリ云フ。」とあり、これはこの科が非常に特殊化した花序である杯状花序をつけ、それは小型のカップ状の総苞の内側に花が付いている花序で、ちょうど灯明皿の中に油を入れて火を灯している様子に因む。

ところがトウダイグサ科の学名は Euphorbiaceae で、灯台とは全く関係なく、草を切った時に出る白汁を薬として利用した医者エウフォルボス Euphorbus に因むという。学名と和名は関連するものでもないが、ならば和名をもっとその植物に即した名前にしてもよかったのかな、とも思う。

そこでこのエノキグサである。葉がアサ科のエノキに似るからエノキグサとされたというが、別名のアミガサソウはどうだろうか。

雌花を包む総苞は中央部から半分に折れたような形をしており、茎のある側に雌花が付く。その姿はちょうど阿波踊りや佐渡おけさ

須藤 健一

などで主に女性の踊り手が被る鳥追い笠を内から見た形をしており、雌花を、笠をかぶった人の頭と考えたら目深にかぶった踊り手の姿が浮かんできそうである。

あるいは、ちょっと見方を変えとこんな名前も考えられそうである。

エノキグサの総苞には茎近くの基部に雌花があり、その雌花を火床ととらえトウダグサ（科）の仲間に含まれているが、この総苞をよく見ると茎の反対側の先は細くなり丸く尖る。ここを持ち手と考える。茎の側には多数の紅色を帯びた雄花が穂状に集まった花序を伸ばす。この穂状花序を火のついた蠟燭と考える。すると溶けた蠟が滴り落ちて固まったものが火床にできた果実である。そんな風に考えると、それは手燭そのものである。エノキグサの別名として「テショクグサ」というはどうだろうか。

エノキグサの学名は *Acalypha australis*（南方のイラクサに似た植物）ということであるが、トウダイグサ科エノキグサ属では日本に1属1種の在来種である。アサ科のエノキに拘ることなく和名は《テショクグサ》の方がしっくりくるような気がする。

